

高校生が中学生に情報モラルを教える授業の実践

岡本弘之（聖母被昇天学院高等学校）

浅井和行（京都教育大学）

現在，情報モラル教育の重要性は高まり，新学習指導要領でも重視されている。また情報モラル教育においては従来型の一方的な教え込みの授業から，生徒の「学び」を重視し，影の部分だけを強調するのではなく「賢く使う」という視点での学習が求められてきている。本研究ではこれらの方法・視点を取り入れた「高校生が中学生に教える情報モラル」というテーマの授業を，高校の情報教育の中心である教科「情報」で実践し，生徒の発表・事後アンケートの結果から，その学びの効果を検証した。

キーワード：高校，教科「情報」，授業，情報モラル

1. はじめに

1.1. 情報モラル教育をめぐる現状

情報化社会の進展に伴い，児童生徒たちは早くからパソコン・ケータイなどの情報機器に接するようになった。これら情報機器は直接ネットワークに接続し，児童生徒たちがインターネット上の犯罪の被害者や加害者となる事例も多く発生しており，教育現場での対応が迫られている。

このような現状から，今回改訂された高等学校学習指導要領（2009年改訂）では情報モラル教育が重視され，新学習指導要領に対応する形で出された「教育の情報化に関する手引」（文部科学省，2009）でも，「携帯電話やパソコンなどを通じたインターネット利用が急速に普及し，児童生徒の間にも普及が進む中で，現在，インターネット上での誹謗中傷やいじめ，インターネット上の犯罪や違法・有害情報などの問題が発生しており，こうした問題を踏まえ，『情報モラル』について指導することが

必要となっている」と記述されており，今日の児童生徒を取り巻く現状と，情報モラル教育の必要性について言及している。

同手引では情報モラル教育のねらい・目的について，以下のように述べている。

「『情報モラル教育』とは，情報化の『影』の部分を理解することがねらいなのではなく，情報社会やネットワークの特性の一側面として影の部分を理解した上で，よりよいコミュニケーションや人と人との関係づくりのために，今後とも変化を続けていくであろう情報手段をいかに上手に賢く使っていくか，そのための判断力や心構えを身に付けさせる教育であることをまず念頭に置くことが極めて重要である」

このように単にマイナス面や危険性だけを強調する教育ではなく，「いかに上手に賢く使っていくか」という視点での情報モラル教育を行う重要性を述べている。

1.2. 「教え込み」から生徒主体の「学び」への転換

近年，佐藤学の「学びの共同体」の実践に見られるように，教師が一方的に知識伝達を行う一斉授業の限界が指摘され，小グループを単位とする生徒がお互いに教えあう「学び」を重視する活動を取り入れた授業形態が注目されてきている。

情報モラルの指導のための具体的な学習活動においても同様で，前述の手引では「一方的に知識や対処法を教えるのではなく，児童生徒が自ら考える活動を重視」と，一方的な「教え込み」から生徒が主体的に「学ぶ」授業への転換を求めている。

2. 研究の目的

現在情報モラル教育の重要性は高まってきている。その内容としては「生徒の主体的な『学び』を重視し，かつ情報化社会の影の部分ばかりを強調しない情報モラル教育」が求められている。

堀田龍也も従来の情報モラル教育が，情報化の影の部分への

対策として始まり、「どうしても影への対処法として指導内容が検討されることが多い」（堀田，2004，p.133）と課題を指摘している。その上で，情報化社会で必要な公民的資質を持った「賢いメディア利用者」を育てる必要性を述べている。

堀田はその実践事例として，一方的に教師が教え込むのではなく，児童生徒が疑似体験を通じて自分で学んだり，自分たちの経験をふまえて友達同士で話し合わせて考えさせたりする授業を多く紹介している。

本研究では，現在求められている情報モラル教育の具体的な実践として，「教える」活動を通し生徒が情報モラルについて学ぶ授業を提案する。佐藤の実践に見られように「教える」活動は自分の知識・理解を整理することにつながり，「学び」の効果は高い。しかし情報モラルを「教えあう」という活動を取り入れた先行実践は少なく，上述したような授業を企画し実践し提案することは，情報モラル教育の普及に寄与するものと考えられる。

3. 研究の方法

「教える」活動を取り入れた情報モラル教育の具体化として，本研究では勤務校の高校2年の情報科の授業の課題として，「中学生に情報モラルを教えよう」という授業を企画した。

この授業による学びについては，授業観察，最終発表・制作物の評価，生徒アンケートを通じて，考察を行うものとする。

詳細については，以下の通りである。

3.1. 授業実践

3.1.1 授業対象者

大阪北部の中高一貫女子校の高校2年生，情報C選択者39名が対象である。この生徒たちは，高校1年時に情報A（2単位）を履修，2年時で情報C（2単位）を選択し，教科書に掲載されている情報モラルの課題や，情報の検索方法やまとめ方，マルチメディアを使った表現，プレゼンテーションなど一通り学習している。

3.1.2 授業者

筆者ともう1名の情報科教員のTT（ティームティーチング）で実施した。

3.1.3 実施期間

平成21年2月から3月にかけて，45分間授業で5時間分である。

3.1.4 教科・領域

情報C「総合実習」の単元である。

3.1.5 授業のテーマ

「中学1年生にケータイ・インターネットのマナー・モラル・安全について教える」というテーマで，グループ発表を行うことを授業の目標とした。

3.1.6 グループの編成

座席配置に基づく4～6名の小グループを教師が指定して編成した。（A組は5グループ，B組は4グループの計9グループを編成した）

3.2. 授業の展開

3.2.1 授業の展開

展開	内容
導入（1時間）	<ul style="list-style-type: none">・ 課題の説明・グループ分け・ グループでのブレインストーミング （個人の経験交流→意見の交換→企画の検討）・ 企画書作成（会議の内容をまとめて作成する）
制作・準備 （3時間）	<ul style="list-style-type: none">・ 情報収集（経験，インターネット，図書館での調べ作業）・ 制作（冊子，プレゼンテーション，台本の作成）・ リハーサル
発表（1時間）	<ul style="list-style-type: none">・ 授業内（各クラス内）で発表・ 相互評価（発表・内容・デザインの3観点）・ 教員による評価（生徒の相互評価と同観点）

	・ 自己評価（時間の使い方など，他の発表から学んだ事の記入）
--	--------------------------------

3.2.2 実施時の留意点

- ・ 「何を伝えるか（内容）」 「どのように伝えるか（方法）」 については，自分たちの中学時代の経験や，今の中学生の現状を考えて，グループで相談して決定させた。生徒の決定を尊重するため，テーマが重なった場合でもあえて調整はしなかった。
- ・ 話し合いの記録，企画書，発表準備とすべての段階においてワークシートを用意し，短い時間でもスムーズに展開できるように工夫した。
- ・ 話し合いや発表資料の制作の間，教員は適宜巡回し，「説得力を持たせるためにグラフを使ってはどうか」「中学1年生にその言葉はわかるのか」など，グループの発表がより効果的なものとなるようアドバイスを行った。

4. 授業実践の結果

4.1. 生徒の発表の結果

各グループの発表の結果について，以下の表にまとめた。

表 1 生徒の発表内容一覧

	方法	概要	扱った情報モラル
1	寸劇	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友人関係のこじれからブログ・掲示板での悪口の書きあいに発展する寸劇 ・ お互い話し合って解決するケースや名誉棄損で逮捕となるケースなど数パターンを演じた 	ブログ・掲示板の悪口
2	発表	<ul style="list-style-type: none"> ・ ネチケットいろいろとして，タレントや友人の写真を勝手にブログに貼りつけない ・ チェーンメールとは何か説明し，回さなくても何も起こらないことを説明した 	著作権・肖像権 チェーンメール

3	発表	・ダイエット食品の無料サンプルプレゼントを偽装したフィッシングサイトを取り上げ、個人情報が悪用される危険性を説明した	フィッシングサイト 個人情報の管理
4	クイズ	・プロフ・ブログ・掲示板についてよい例・悪い例2つの画面をそれぞれ見せ、クイズ形式で判定させながら、なぜ悪い例となるのかを説明した	プロフ・ブログ・ 掲示板、個人情報の管理、 肖像権 掲示板の悪口
5	発表	・チェーンメールの実例をいくつか見せて、そのイメージを持たせ、最後にまわってきた場合の対応の参考となるサイトを紹介した	チェーンメール
6	まんが 冊子	・自分のブログにアクセスしてきた男性に会いに行き、危険な目にあう漫画の冊子を作り、ネット上の出会いの危険性を説明した	ブログ 出会い系
7	再現物 語	・出会い系サイトで起こった「少女が被害者となる実際の事件」を紹介し、最後に出会い系サイトの被害者の多くが18歳未満の女子児童生徒であることをデータで説明した	出会い系サイト 犯罪被害
8	発表	・自分がWebやブログを運営する際に気をつけたいといけない著作権、素材の再配布などを取り上げて説明した	著作権 発信上の注意
9	発表	・警察庁ホームページにある児童向けの出会い系サイトの話を紹介し、危険性を説明した ・後半はブログ上で悪口を書いたことをきっかけに、悪口の書きあいに発展するケースを紹介、利用上の注意事項を説明した	出会い系サイト 犯罪被害 ブログの悪口

4.2. 中学1年生への実際の説明

授業の5時間目に全グループが発表したあと、高校生が中学1

年生全員（75名）に対して実際に発表をする時間を設定した。授業計画当初は全グループの発表を企画したが，両学年の都合が合う時間は放課後しかとれず，学年末テスト最終日の放課後45分での実施となった。そのため時間的制約から全グループではなく，2グループだけの発表となった。

4.2.1 中学1年生への発表時の展開

中学1年生への 発表（45分）	① 趣旨の説明（情報科教員）・5分 ② 生徒2グループの発表・30分 ・ ブログの悪口の寸劇（表中1のグループ） ・ 出会い系サイトの実際の事件（表中7のグループ） ③ 発表内容の補足・まとめ（情報科教員）・5分 ④ アンケート・感想記入・5分
--------------------	---

4.2.2 発表グループの決定方法

発表するグループの選定は，中学1年生の担任が行った。まずテーマとして，中学1年生の間で利用者が増えつつあった「ブログ」の利用に関するもの，今後生徒が被害者となる可能性の高い「出会い系サイト」にしぼり，その上で中学1年生にとってわかりやすい方法を工夫していた2グループを選択した。

4.3. 生徒の事後アンケートの結果（高校生）

授業終了後にアンケートを質問紙法で実施した。授業を受けた39名全員が提出したが項目によっては無回答もあった。質問内容・回答結果は以下の通りである。

表2 高校生へのアンケート結果

	質問項目	はい	どちらかといえ ばはい	どちらかとい えはいいえ	いいえ
1	中1という相手を意識して制作で きましたか？	24	12	3	0

2	自分の中学時代の経験をふまえて制作できましたか？	22	10	6	0
3	今回調べることでより詳しい知識がえられましたか？	22	14	2	0
4	制作で得た知識は自分のこれからの利用に役立ちますか？	26	11	1	0
5	ネット利用にさらに深い知識を得たいと思いましたか？	22	13	1	0
6	授業で得たソフトの操作技術は今回の役に立ちましたか？	29	8	1	1
7	授業で得たモラルの知識は今回の役に立ちましたか？	19	17	2	0
8	授業で得たプレゼンの知識は今回の役に立ちましたか？	29	8	1	0

(2008年度高校2年情報C選択者39名全員が回答，
項目により無回答もあり)

4.4. 生徒の事後アンケート結果（中学生）

中学生へのプレゼンテーション終了後に質問紙法で，出席した中学1年生75名にアンケートを実施した。その質問項目と回答は次の通りである。

表3 中学生へのアンケート結果

	質問項目	はい	どちらか とといえば はい	ふ つ う	どちらか とといえば いいえ	いいえ
1	先輩の説明はわかりやすかったですか？	62	10	3	0	0
2	説明の内容は興味をもてるものでしたか？	51	16	8	0	0
3	先生より，先輩が説明することでより興味をもつことができましたか？	56	11	7	1	0

4	説明のあった内容は聞いたことがありますか？	66	1	2	5	0
5	聞いた人はどこで聞きましたか？ (複数)	家庭 11 テレビ 42 学校 50 友人 5 その他 2				
6	教えてもらったことは今後の参考になるとおもいますか？	56	12	7	0	0

(2008年度中学1年75名全員が回答，項目により無回答もあり)

5. 考察

5.1. 「教える」ことによる「学び」

今回の授業では、「中学生に情報モラルを教える」という課題設定を行い、「教える」という活動に焦点を当てた。教育現場では、「誰かに教えることは，効果のある勉強方法である」ということがよく言われ，「教える」ための活動を通して学んでほしかったからである。

この「教える」ことによる「学び」について，“Learning Patterns 2009”（慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス学習パターンプロジェクト,2009）は，次のような点をあげている。

- ・自分が「理解した気」になっていることは，気づきにくい
- ・話すことで初めて，自分がどのような理解をしているのかが明確になる
- ・うまく整理していない話は，理解するのが難しい
- ・相手が理解できるように話すためには，情報の整理が必要である
- ・相手の状況に合わせて教えるということを通じて，様々な文脈での理解を図る

「教える」という活動は自分の理解を見つめ直し，深め，伝えるという活動であり，今回のテーマである情報モラルの育成においてもこれらの効果が期待できる。また「教える」というだけでなく，「下級生に教える」というテーマ設定も生徒のモチベーションをあげ，「学び」の効果を強めることになったと考え

られる。

「中学生の前で格好悪いことはできない」「プレッシャーを感じる」という生徒の発言が授業中に見られ、高校生は先輩としてのメンツやプライドをかけてよりよい発表を行うように努力する結果となった。

学校には、クラブ指導・生徒会指導など、教師だけでなく先輩から後輩へ伝えるという文化もあり、上級生の経験をふまえた知識を下級生に伝えることについて、教える側・教えられる側の生徒の違和感は少ないと感じた。

5.2. 発表の結果

9つのグループの発表テーマを見ると、「出会い系」の問題を取り上げたグループが3つあった。警視庁サイバー犯罪対策ホームページによると、2008年度の「出会い系」サイトにめぐる犯罪被害者のうち63%は女子中高生というデータがある。

対象校は女子校であるので、このような犯罪被害の実態から、高校生は中学生に伝えたいこととして「ネット上で知り合った人と直接会う危険性」というテーマを取り上げたことが予想される。

このような被害防止という視点は、「教師のための『情報モラル』指導実践キックオフガイド」(JAPET 日本教育工学振興会, 2007)で、以下のように書かれている。

「我が国の情報モラル教育の目的には、いわゆる情報教育の観点とは別の側面があります。それは『情報社会に的確な判断ができない児童生徒を守り、危ない目に合わせない』、すなわち危険回避(情報安全教育)の側面です。特に、情報モラル教育の中で、現在、緊急に対処しなければならないのは、安全教育の側面と考えられています」

情報モラル教育において、出会い系サイトなどの被害から児童生徒を守ることは、緊急に対処すべき(教えるべき)項目の一つであり、このテーマを選択した高校生の視点は的確であったといえる。

次に多いテーマは「チェーンメール」「ブログの悪口」であり、それぞれ2つのグループが取り上げた。このテーマについても「子どもの携帯電話利用に関する調査」(文部科学省,2009)における調査項目「携帯やパソコン利用による問題行動」において、児童生徒が1番目、2番目に「経験した」と回答した数が多いテーマであった。同調査の詳細を見ると、「チェーンメールを送ったことがある？」は中学2年生で13.6%、高校2年生では22.3%が「Yes」と回答、「インターネットの掲示板やメールで他人の悪口を書いたことがある？」は中学2年生の3.3%、高校2年生の5.0%が「Yes」と回答している。いずれも中学生より高校生の数値が2倍近く多いことから、中学生がこれから経験する可能性が高い問題といえる。

高校生が発表するテーマを決める際には、これらの調査結果を見たわけではなく、自分たちの経験からこれらのテーマを「中学生に伝えるべき内容」として考えた。中学1年生に伝えるべき内容の選択について、高校生はきわめて妥当な判断をしたといえる。

5.3. アンケート結果

高校生は、自分たちの情報モラルの経験をいかし、かつ中学1年生に適した情報モラルの内容を提供できたかについて、アンケートの回答結果から述べていく。

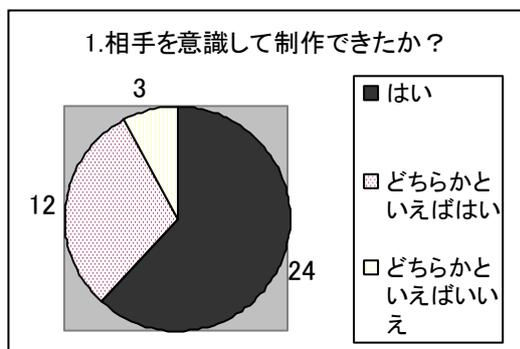


図 1 高校生への質問1の結果

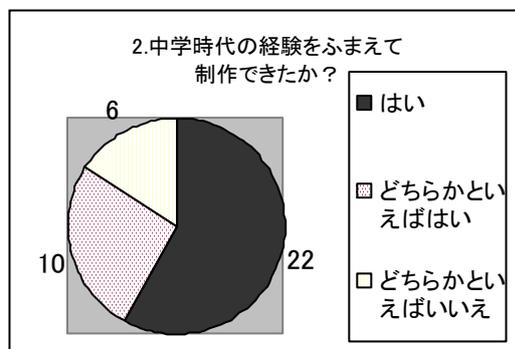


図 2 高校生への質問6の結果

まず「中学1年生という相手を意識して制作することができ

た」という質問について「どちらかといえばはい」も含むと 92% の高校生が「はい」と回答した。授業観察でも、「この字読めるかな」「プロフって何のことかわかるかな」などと発達段階や、ネットに接する経験をふまえて制作しようとした発言が複数の班で見られた。

「中学時代の経験をふまえることができたか」という質問への回答についても、「どちらかといえばはい」も含むと 95% が「はい」と回答した。授業観察でも、「こんなチェーンメールが来た」という意見の共有や、「こんな話を聞いたことがある」という自分や自分の周りの経験をふまえて考えようとする発言が見られ、発表テーマにおいて掲示版ではなくブログによる悪口がテーマで選ばれているのも、自分たちの周辺で実際にあったケースを参考にしたようである。これらのアンケート結果・授業観察から見ても、高校生は自分たちの中学時代の経験を振り返り、かつ今の中学1年の発達段階・経験をふまえて制作したと考えられる。

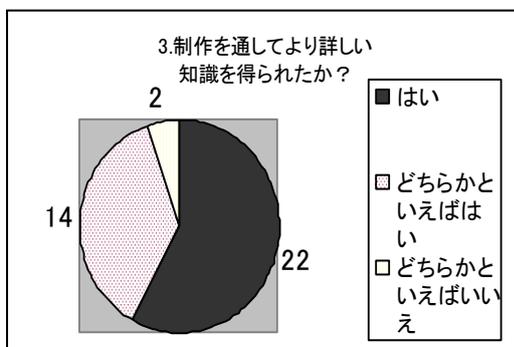


図 3 高校生への質問 3 の結果

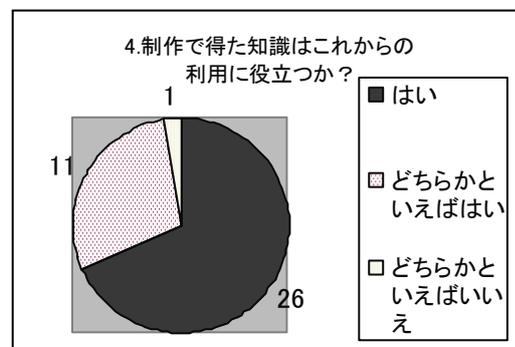


図 4 高校生への質問 4 の結果

次に制作過程での「学び」について述べる。前述のように自分たちの経験から、中学生に伝える内容を考えた。説得力のある伝え方をするために新たにデータや実例などを調べ、より深い知識が必要となった様子が見られ、その事実をアンケート結果で見ると、「制作を通してより詳しい知識が得られたか」との質問に「はい」「どちらかといえばはい」と 92% の生徒が回答した。

また「制作で得た知識はこれからの利用に役立つか」という質問には、「はい」「どちらかといえばはい」が97%であり、これらの制作を通して、より詳しい知識を手に入れ、自分たちの将来に役立つ情報モラルの「学び」が制作過程にあったと考えられる。

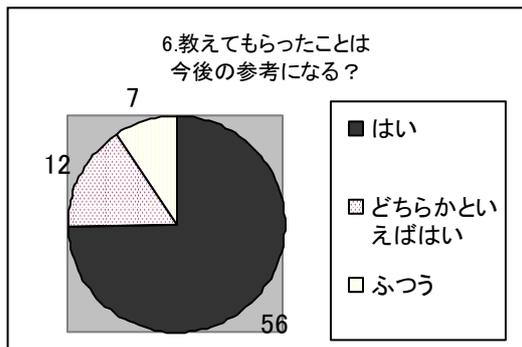


図5 中学生の質問6の結果

最後に中学生1年生のアンケート結果について述べる。質問6の「今回教えてもらったことは今後の参考になるか」に対し、92%が「はい」「どちらかといえばはい」と回答した。この結果からは二つのことが読み取れる。

一つ目は高校生が選択したテーマが中学生にとって役に立つ・参考になる知識であったことである。そして二つ目は、話を聞いた中学生にとっても、今回のとりくみは情報モラルを身につける学習となったことである。この結果から、今回の実践は教える側の高校生にとっても、教えられる側の中学生にとっても情報モラルの学習になったといえる。

5.4. 授業を通じた生徒の認識の変化

授業の経過から、生徒の認識の変化も追ってみる。

例えばプロフサイトに個人情報を書かないことをテーマに選んだグループは、「個人情報を書いてはいけない」という知識をそれまでの授業で持っていた。これを中学生にわかりやすく伝えるために、本物そっくりのサンプルのページを作って、具体的にいい見本、悪い見本を示して教えることとした。

さて実際に作りだすと，個人情報を出さないようにしすぎると今度はプロフサイトの意味がなくなることに気付いた。では具体的にどうすればいいかについて，グループで話し合ったり Web サイトで調べたりしてサンプルのサイトを作り上げた。こうして「個人情報を出さないよう配慮しつつもプロフサイトを賢く利用する」実践的な方法を自分たちで学んでいったのである。

これは一例であるが，他のテーマを調べたグループでも同様の経過があり，「～してはいけない」という知識から，これをふまえて「賢く利用するにはどうすればいいか」という実践的な方法について自分たちで学んでいった。

もちろんこのあと，この学びをふまえて自分たちの行動の変容へと移ってほしいと考える。これについて，例にあげたグループの生徒の中に，自分のプロフサイトに載せていた写真や名前・住所を差し替えた者もいた。全体での調査を行っていないのでその他の詳細な状況はわからないが，少数でも行動の変容までたどり着いた生徒が存在したことは大きな成果である。

6. 今後の課題とまとめ

6.1. 課題

今回の実践を振り返り，次回の実践に向けた課題を見ていくと次の4点が挙げられる。

- ① 自分の関心のあるテーマが選択できるようなグループ編成とすること
- ② 高校生が，中学1年生の実態・現状をよりわかるような仕掛けをつくること
- ③ 高校生のすべてのグループが，中学生の前で発表できるようにすること
- ④ 中学生にとっては，一方的な伝達となってしまったことを改善すること

これらの課題の改善方法として，以下のような手立てを考えた。

①については、グループ分けの前に全体で取り上げるべきテーマを話し合い、テーマ別グループを編成する。生徒は自分の関心のあるテーマを選択してグループに参加する。これによりグループ同士のテーマの重複を防ぎ、同じテーマに関心を持つ生徒のグループを編成することでその内容が深まり、モチベーションを高めることも期待できる。

②については、中学1年の担任をゲストとして授業に招きインタビューをしたり、中学1年生の生徒にアンケートを実施したりするなど、実態・ニーズを事前につかんだ上で、今回の課題を実施する。

③については、中学1年生だけでなく他の中学校の学年にも、3グループずつ分かれて発表に行く機会を作り、高校生の全グループが発表する機会を確保したい。必ず発表の機会があることで、授業の目標・テーマがより生かされる実践となる。

④については、田中博之（2000）の「世代間交流」の交流学习の事例にみられるように、学びの過程において、中学生と高校生が一緒になって考える時間をとるなどの工夫が考えられる。これは②の課題の解決にも有効といえる。

6.2.まとめ

考察で述べたように、高校生は「教える」という目的のために、自分たちの経験を振り返り、新たな知識を身につける経過をたどったことがわかった。高校生が中学生に教えられだけの完璧な情報モラルを身に付けているとは思えないが、今回の「教えるための学び」を通して、「自分がどうすべきか。どうあるべきか」ということを真剣に考えた。

この点から「高校生が中学生に情報モラルを教える」という授業実践は、高校生の情報モラルについての学びになったと言える。これを教科「情報」の授業として見た場合、情報モラルについての知識・理解を深めただけでなく、「相手に伝える」というプレゼンテーションの技術も用いることで、今回の授業の内容・方法の両方が学びになったと言える。

中学生にとっても，教師や外部講師といった「大人」による指導ではなく，先輩から教えてもらうことで親近感がもて，より興味深く話を聞くことができたといえる。

情報モラルとは，学習指導要領（文部科学省，2008）の総則によると「情報社会で適正に活動するための基となる考え方や態度」と定義され，単に知識として知っているだけでなく，児童生徒がその場面に応じて実践できることが大切であるとされている。そのためには「教育の情報化に関する手引」が指摘する「一方的に」「マイナス面や危険性」の知識を与えがちな現状の情報モラル教育から一歩進め，生徒自ら主体的に考える「学び」を重視し，かつ「賢く使う」という視点での情報モラル教育の実践が重要である。

今回の授業は「賢く使う」ことを考えさせるために，「教える」という活動を目標に置いた実践を行った。

知識として情報化社会の影の部分を知っているだけではなく，影の部分を知った上で「賢く」使いこなすことのできる力を持った「未来の大人」を育てるために，今後も情報モラル教育の授業開発と実践を重ねていきたい。

< 参考文献 >

- 岡本敏雄・西野和典・香山瑞穂編著（2002）『情報科教育法』丸善
- 岡本弘之・浅井和行（2008）「情報モラルをどう教えるか～『教え込む』から『気付かせる』授業実践へ」日本教育メディア学会第15回大会発表論文集，pp.105-106
- 岡本弘之・浅井和行（2009）「高校生から中学生に情報モラルをプレゼンテーションする授業実践」日本教育メディア学会第16回大会発表論文集，pp.145-146
- 慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス学習パターンプロジェクト（2009）”Learning Patterns 2009”，No.31
<http://learningpatterns.sfc.keio.ac.jp>（2009.10.7入手）

警視庁サイバー犯罪対策ホームページ「危険な出会い系サイト」
<http://www.npa.go.jp/cyber/deai/teens/> (2009.10.8 入手)

佐藤学(2006)『学校の挑戦』小学館

下田博次(2008)『学校裏サイト』東洋経済新報社

社団法人日本教育工学振興会編(2007)情報モラル指導実践キット
オフガイド, p.4

<http://kayoo.org/moral-guidebook/> (2009.10.31 入手)

田中博之(2000)「マルチメディア作品制作を支援する総合学習
カリキュラムの開発と評価」 p.18

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/3140>(2009.11.30 入手)

堀田龍也(2004)「ネットリテラシー(ネットマナー)をどう培
うか」教職研修 33(3), pp.44-47

堀田龍也(2004)『メディアとのつきあい方学習』JUSTSYSTEM

堀田龍也(2006)「ケータイ・インターネットとの『つきあい方』
を教える」児童心理 60(2), pp.236-239

堀田龍也(2006)『メディアとのつきあい方学習実践編』
JUSTSYSTEM

水越敏行・村井純監修(2008)「新・情報C教科書」日本文教出
版社,第4章 p.85

文部科学省(2009)「教育の情報化に関する手引」 pp.72-78

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413(2009.10.17 入手)

文部科学省(2009)「子どもの携帯電話の利用に関する調査結果
について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/05/1266484(
2009.10.1 入手)

Using Student Presentations to Increase Awareness of Internet Safety

OKAMOTO, Hiroyuki (Assumption High school)
ASAI, Kazuyuki (Kyoto University of Education)

Digital citizenship education has become increasingly important as reflected in the new curriculum guidelines released by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Teaching methods have also changed from the old top-down teacher-focused approach to a student-centered approach where “learning” by students is emphasized. Instead of focusing only on the problems and dangers on the Internet, students are being taught how to use the Internet responsibly. My research explores digital citizenship taught with this new approach in a high school “information studies” class where high school students taught junior high school students about Internet safety. Student presentations and questionnaires given after the class were used to verify “student learning.”

Keywords: “information studies” 、 Digital citizenship education